

か。その一つの選択肢として、薪などバイオマスの利活用の可能性について、アンケートの分析結果などを交えてお話しました。薪ストーブを使っている世帯の平均では、年間9m³の薪を使用し、CO₂に換算すると3tの排出削減に相当します。それに対して参加者の方から「薪は石油に比べて価格が高いし、割るのも大変」といったご意見をいただいたかと思うと、「ヨーロッパでは森林資源の熱源としての利用も進んでいるのに日本では相変わらず石油の方が

安いという議論が進まないのが残念」といったご意見をいただきました。また「薪や古い道具には憧れがあるが、何から始めていいのかわからない。イベントなら参加しやすいので、是非やってほしい」など、参加者同士で活発にやりとりされていました。

里山の問題をすぐに解決することは難しいですが、多くの人に関心を持ち、それぞれの地域で保全や利活用について議論を深めていくことが必要ではないかと改めて感じました。
(畑中健一郎)

第7回 センサーカメラがとらえた高山帯の生物多様性 12月10日

最近、高山帯に見られる生きもの、特にニホンジカやニホンザルなど中大型の野生動物の問題がクローズアップされています。ニホンジカによる採食は高山植物に大変な被害をもたらし、南アルプスでは深刻な状況です。近年では北アルプス山麓でもニホンジカの個体数が増加し、北アルプス高山帯への侵入が懸念されています。またイノシシによる高山植生の掘り起こしも乗鞍岳等で問題となっています。昨年は、大天井岳でニホンザルがライチョウのヒナを捕獲するというショッキングなニュースが研究者により報告されました。



センサーカメラに写ったイノシシ

ところで私たちは、高山帯の自然や生きもののことについてどのくらい知っているでしょうか。このようなニュースを新聞やテレビで目にするたびに高

山帯では大変なことがおこっているのではないかとこの心配ばかりが先にたってしまいます。そこで今回は、センサーカメラを通してみた高山帯の哺乳類や鳥類のことを話題提供しました。

長野県では、2007年、2011年と2012年に高山帯の野生動物の現状をとらえるために、後立山連峰の爺ヶ岳・岩小屋沢岳の高山帯に赤外線センサーカメラを設置して、ニホンザルやキツネなどの野生動物がどの程度撮影されるかを調査しました。2013年以降は、研究所がその調査を継続・発展させて、高山帯における哺乳類や鳥類の生息状況をモニタリングしています。その結果、センサーカメラによってこれまでに哺乳類14種、鳥類21種、両生類1種が確認され、2013年にはニホンジカ、2015年にはイノシシがこの地域で初確認されました。その他にも、



ライチョウ